

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 2

金 川 古 墳

1982年3月

岡山県御津町教育委員会

序

豊かで美しい自然にめぐまれた御津町の文化は、旭川やその支流であります宇甘川、新庄川、三谷川の流域からはじまっています。

旭川の西岸、宇甘地区には縄文時代晚期から弥生時代にかけての「原遺跡」があり、また新庄川流域の五城地区岩井山丘陵には多くの古墳が分布しております。

このたび御津中学校の移転が計画され、国鉄津山線金川駅西側の妙見山から通称松尾山にかけて、約4haが校地として造成されることになりました。ところがこの校地予定地内には金川古墳が周知されていることから、県教育庁文化課と協議を重ねましたが、現状保存が困難なことからやむなく発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、金川古墳は竪穴式石室を内部主体とする円墳で、6世紀前半に築造されたものと判明しました。副葬品としては須恵器や鐵器が出土しており、この地域の有力豪族の墓と考えられます。

本書はこうした調査の成果をまとめたものであり、今後古代史解明の一資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にあたって御指導を賜りました岡山県教育庁文化課等関係各位、並びに発掘作業に従事くださいました方々に対し衷心から厚くお礼申しあげます。

昭和57年3月

御津町教育委員会

教育長 佐藤三郎

例　　言

- 1 本書は御津町教育委員会が、御津中学校移転工事に伴い発掘調査を実施した「金川古墳」の報告である。
- 2 古墳は御津町大字字垣に所在する。
- 3 発掘調査は平井 勝（岡山県教育庁文化課）が担当し、昭和56年（1981年）3月16日から4月9日まで実施した。
- 4 出土遺物の整理は県文化課分室（岡山市西古松）にて行った。
- 5 出土遺物は報告書刊行後、御津町教育委員会で保管している。
- 6 本書の執筆・編集は平井が行った。
- 7 本書作成の過程で下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表します。
北村智子（県文化課分室）、亀田菜穂子（県文化課分室）
- 8 凡例
 - a 第2図の地形図は国土地理院の25000分の1の地図（金川）を複製したものである。
 - b レベルは海拔高度を表わす。
 - c 方位は第1図、第2図以外はすべて磁北を示す。

目 次

序

例言

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第Ⅱ章 古墳の位置と歴史的景観	2
I 古墳の位置	2
II 歴史的景観	2
第Ⅲ章 調査の経過	5
第Ⅳ章 古墳	7
I 墳丘	7
II 周溝	8
III 埋葬施設	9
IV 遺物	12
第Ⅴ章 結語	14

図 目 次

第1図 古墳の位置	2
第2図 遺跡分布図 (S:1/25000)	3
第3図 調査前の墳丘測量図	5
第4図 調査後の墳丘測量図	7
第5図 墳丘断面図	8
第6図 南主体部実測図	9
第7図 副葬品出土状態	10
第8図 須恵器	11
第9図 鉄製品	12

図版目次

- 図版1 1 古墳遠景（南から）
2 古墳遠景（北西から）
- 図版2 1 調査前の古墳（南西から）
2 調査前の古墳（東から）
- 図版3 1 確認調査風景（西から）
2 確認調査風景（南から）
- 図版4 1 Sトレンチの周溝（南から）
2 南主体部確認状態（東から）
- 図版5 1 全面調査風景（南東から）
2 全面調査風景（北東から）
- 図版6 1 全面調査風景（南東から）
2 全面調査風景（東から）
- 図版7 1 南主体部（東から）
2 南主体部（西から）
- 図版8 1 石室の蓋石除去（東から）
2 副葬品出土状態（北から）
- 図版9 1 副葬品取り上げ後（西から）
2 墓壙（西から）
- 図版10 1 列石状遺構（西から）
2 列石状遺構（南東から）
- 図版11 1 西側の列石状遺構（西から）
2 北側の列石状遺構（北から）
- 図版12 1 Wトレンチ墳丘断面（南西から）
2 Wトレンチ周溝断面（南から）
- 図版13 1 Eトレンチ墳丘断面（南から）
2 Eトレンチ周溝断面（南から）
- 図版14 1 調査後の墳丘（南から）
2 調査後の古墳全景（北西から）
- 図版15 須恵器
- 図版16 鉄製品

第Ⅰ章 調査の経緯

御津郡御津町は岡山県三大河川の一つ、旭川の中流域に位置する。旭川はほぼ町を東西に二分するように南流し、その両岸には狭いながらも沖積地が形成されている。

町の中心街は旭川の西岸、宇甘川との合流地点に形成され、ここに国鉄津山線の金川駅がある。駅の西側は丘陵となり、その頂部に金川古墳は所在する。

金川駅の東側、旭川との間には御津中学校が所在する。中学校は校舎が老朽化しており、また運動場も狭いことから新築移転工事の計画が立案された。ところが平野が狭いことから、適当な学校用地がなく、金川駅西側丘陵を造成し、その用地とすることになった。

当教育委員会ではこの丘陵上に周知の古墳が所在することから、町当局に対し文化財保護法（57条の3）に基づく書類の提出を指示し、同時に県教育庁文化課に指導を仰いだ。

昭和55年6月13日付け御企第98号で御津町長白鷗勝彦より『埋蔵文化財に関する協議について』が提出された。県教育委員会に進達後、県教育庁文化課・町役場・町教育委員会で協議を重ねたが、他に用地がないことからやむなく記録保存の調査を実施することになった。

調査は御津町教育委員会が県教育庁文化課専門職員の指導のもと、昭和56年3月16日から4月9日まで実施した。

なお調査にあたっては県教育庁文化課近藤信司前課長、早田憲治課長をはじめ、吉光一修課長代理、河本 清埋蔵文化財係長には御指導と御援助をいただいた。また町文化財保護委員の方々からは御助言を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

御津町教育委員会 教育長 佐藤三郎

次長 河田正弘

調査員 平井 勝（岡山県教育庁文化課文化財保護主事）

調査参加者 綱本善光（筑波大学） 武田恭彰（中央大学）

作業員 元家隆典、納所啓之、大谷一馬、内田 恵、河田双葉、宗次こずえ

第Ⅱ章 古墳の位置と歴史的景観

I 古墳の位置

御津町は岡山県の中央よりやや南に位置し、南は岡山市に、東は赤坂町・山陽町と、北は建部町、西は加茂川町に接している。町の大部分は山地であるが、町の東を北から南に蛇行する旭川と、北西から東に流れ金川で旭川と合流する宇甘川、さらに北東から西流し、同じく金川で旭川と合流する新庄川の西岸には狭小な平野が形成されている。

金川古墳は宇甘川と新庄川が旭川に合流する金川の南西丘陵上に位置する。この丘陵は北西に広がる吉備高原より東にむかって派生したもので、北は宇甘川で、南側は小さな谷によって区切られ、東端は旭川に接している。

古墳はこの丘陵の東先端部近くに所在している。南側の宇垣には町内の旭川流域では一番広い平野が広がっている。

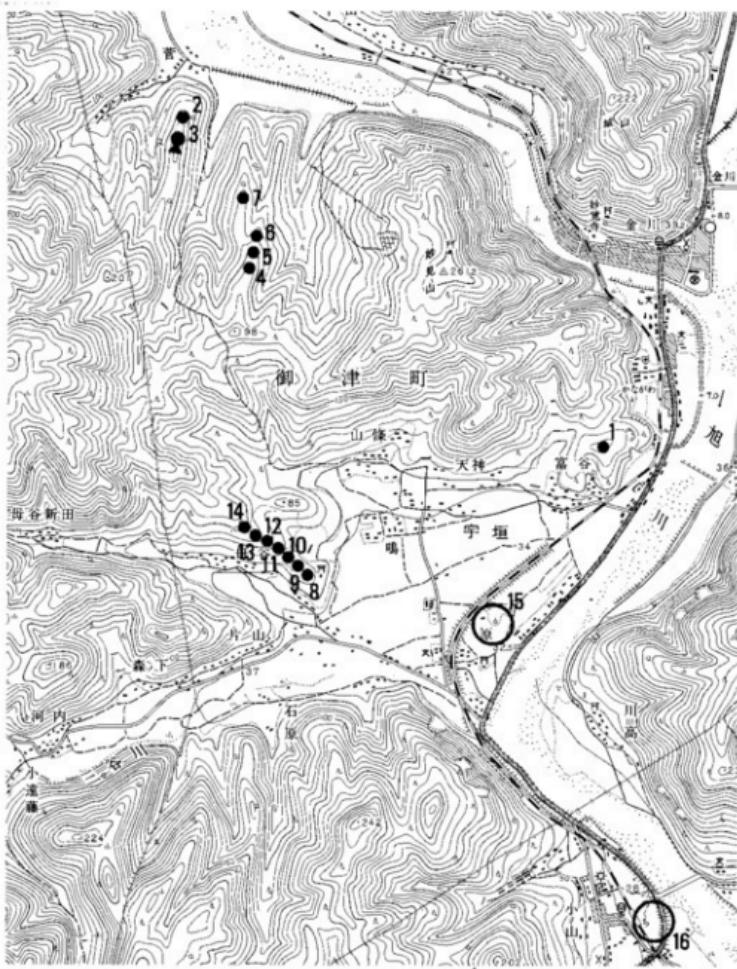
II 歴史的景観

町内の遺跡はその大部分が旭川、宇甘川、新庄川の三河川の流域に所在している。古墳だけに限ってみても、新庄川流域には約50基、金川古墳の所在する旭川流域約20基、宇甘川流域には20基前後が分布している。

ところでこれら三河川流域の古墳のあり方は一様ではなく、数の上からみても不均等が認められる。特に新庄川流域の古墳を見ると、古墳の数も多いが八つ塚古墳と天神鼻第1号墳の前方後円墳が2基認められる。前者が20.5m、後者が33mといずれも小型ではあるが、他の古墳が一辺、あるいは径が10m前後の古墳であること、前方後円という墳形を有することから、新庄川流域の小地域首長の墓と考えられるものである。この2基の前方後円墳の時期については推定しうる資料を得ないが、内部主体が横穴式石室ではないことや、



第1図 古墳の位置



- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1. 金川古墳 | 5. みそのお2号墳 | 9. 宇根山2号墳 | 13. 宇根山6号墳 |
| 2. 菅1号墳 | 6. みそのお3号墳 | 10. 宇根山3号墳 | 14. 宇根山7号墳 |
| 3. 菅2号墳 | 7. みそのお4号墳 | 11. 宇根山4号墳 | 15. 原遺跡 |
| 4. みそのお1号墳 | 8. 宇根山1号墳 | 12. 宇根山5号墳 | 16. 野々口遺跡 |

第2図 遺跡分布図 (S : 1/25000)

天神鼻第1号墳出土の円筒埴輪などから古墳時代前半期の新しい時期と考えられる。したがって南側に接する岩井山古墳群（註1）が方墳を主体とした5～6世紀初頭のものであり、こうした基盤のもとに5世紀代に顕在化した首長墓と思われる。この地域には前半期の古い時期のものは知られておらず、5世紀代になって築造されたものが多い。さらに後期古墳も点在しているが、群集するというようなあり方は示さない。このことは可耕地の狭い所に小集団が点在していたことの反映ではなかろうか。

次に宇甘川流域に目を転じてみよう。この流域にも前方後円墳菅第2号墳が所在する。全長44mで墳丘に葺石が認められる。詳細な時期は不明であるが、前半期のものと推定される。この古墳の周辺には前半期の古墳が多く、こうした小古墳を基盤として築造されたものと思われる。それに対して宇甘川の北岸、中泉地区の古墳は横穴式石室を内部主体とした後期古墳が多く、前者と対象的なあり方を呈している。

金川古墳を含めた旭川流域では宇垣の平野の後背丘陵上に古墳が系列的に築造される以外は点在しており、すべて小型墳である。これは旭川流域に広い可耕地がないことに起因している。

以上、各河川流域単位に古墳分布を見てきたが、やはり新庄川地域が三地域の中では最も卓越している。もっともこうした現在の行政区域内での比較は問題も多いが、自然地形に区画された単位地域内の古墳の分布からは上記の結果が得られる。すると金川古墳は最も劣勢な旭川水系に属することになるが、南側に平野をひかえ、旭川を眼下に眺める丘陵上に1基のみ独立して存在することになり、他の丘陵斜面に位置する古墳とはやや性格を異にするとも指摘できうるのでなかろうか。

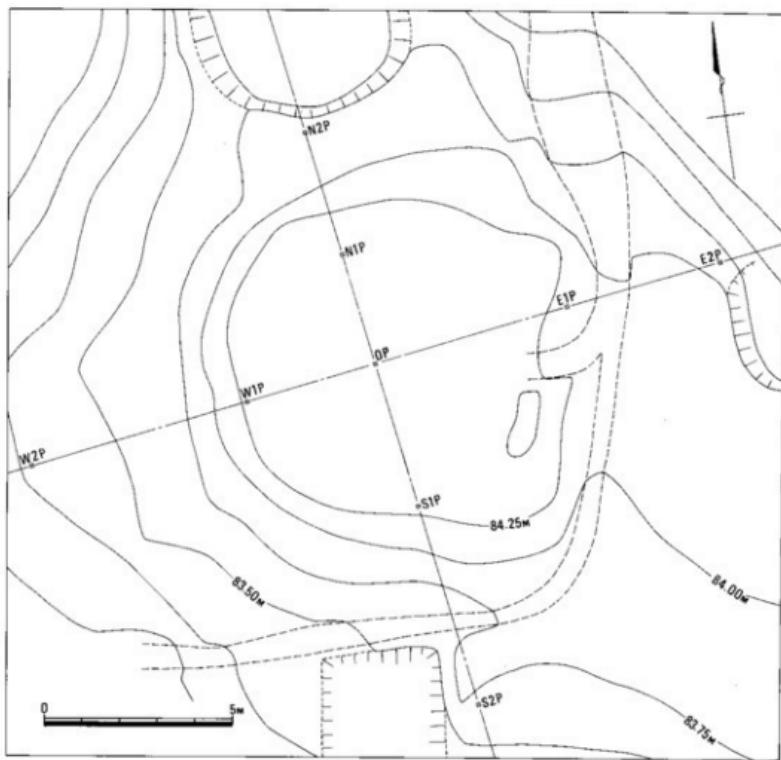
註

註1 神原英郎他『岩井山古墳群』 1976年

第Ⅲ章 調査の経過

古墳は墓地を作る際に削平されており、現状では丘陵頂部に僅かな高まりが認められるにすぎない。かつて須恵器が出土していることなどから古墳と考えて間違いないものであるが、遺物の出土を見ていることや、墳丘の削平度を考え合せると主体部は消滅している可能性が強かった。そこでまずトレンチによる確認調査を行った。

確認調査はまずトレンチの設定に先立ち、一応全面調査の可能性も考え、古墳に基準杭を設定した。ほぼ墳丘の中心部に0ポイント（以下Pと略す）を設定し、墓石の間に略東西南北の



第3図 調査前の墳丘測量図

基準線を設定し、それぞれの線上にE 1 P, E 2 P…等の基準杭を打った。

トレンチは東西南北の基準線にそって設定され、東側はEトレンチ（以下ETと略す）、西はWT、南はST、北はNTと標示した。これらのトレンチでは墳丘と周溝が確認され、周溝をめぐらす円墳であることが判明した。また墳頂では、かつて須恵器が出土したと伝えられる地点を掘り下げた所、石室が確認された。

確認調査の結果、古墳であることが判明し、かつ主体部も残存することから全面調査を行うことになった。なお全面調査に先立って墳頂部の墓石の移転が行われた。

全面調査は周溝外側まで全面表土を除去し、墳丘と周溝の検出に努めた。また墳頂部では南主体部の検出と、トレンチを設定して北主体部の確認を行った。

その結果、周溝をめぐらす南北9.8m、東西10.6mの円墳であることが判明し、墳頂には竪穴式石室が検出され、さらにもう一基主体部が推定された。最後にこれらの実測と発掘後の墳丘測量を行い調査を終了した。

日誌抄

昭和56年（1981年）

3月16日（月） 確認調査開始。墳丘測量と基準杭の設定を行う。

17日（火） ET, ST, WTを設定して掘り下げる。STで周溝を確認する。

18日（水） NTを設定後掘り下げを行う。墳頂部南寄りの位置で石室を確認する。

19日（木） 北西部の表土剥ぎを行う。

20日（金） 南西部の表土剥ぎを行う。ST, ET, NT, WTの断面実測を行う。

23日（月） 南西部は周溝の掘り下げを完了する。墳丘上の墓石を移転する。

24日（火） 北西は墳丘と周溝の検出を完了する。前日に続き墓石を移転する。

26日（水） 北西部墳頂端で列石状遺構を検出する。南主体部墓壙検出を行う。

27日（金） 北東部の表土剥ぎと南主体部石室内掘り下げを行う。

28日（土） 南東部の表土剥ぎと南主体部石室内掘り下げを行う。列石状遺構の検出完了。

30日（月） 南主体部石室内掘り下げと列石状遺構の実測を行う。

4月1日（水） 南東部の表土剥ぎと南主体部石室内掘り下げを行う。

3日（金） 南主体部掘り下げ完了。遺物出土状態の写真撮影と実測を行う。

6日（月） 周溝の掘り下げをすべて完了する。南主体部の実測と北主体部の確認を行う。

7日（火） トレンチによる北主体部の確認と南主体部の実測を行う。墳丘断面実測。

8日（水） 墳丘断面実測と南主体部の石室を解体する。

9日（木） 墳丘測量と南主体部墓壙実測を行いつの調査を終了した。

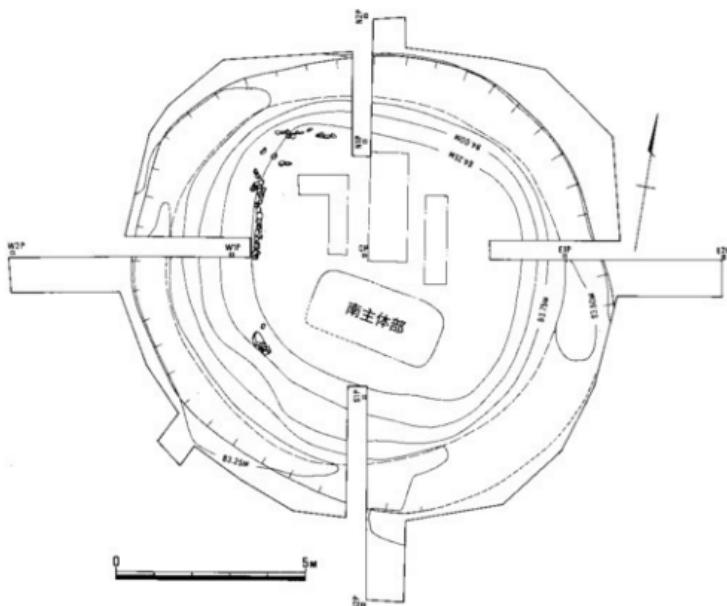
第Ⅳ章 古 墳

I 墳丘

墳丘は丘陵頂部の高まりを利用し、周溝を掘削することによって墳形と、墳丘基底部を整えている。平面プランはやや不正円形を呈しており、南北9.8m、東西10.6mを測る。

墳丘上部は削平されて平坦になっており、その高さは周溝底部から約1mを測る。そのうち盛土は地山上に約40cm程度残存するが、石室の蓋石との関係からさらに50cm程度の盛土があったものと推定される。また盛土の状態は、土葬による擾乱部が多いことから良好な断面観察ができるものの、ほぼ水平に土を積み上げていったものと考えられた。

削平された墳頂西端からは河原石を並べた列石状の遺構が検出された。薄く堆積した表土下



第4図 調査後の堆丘測量図

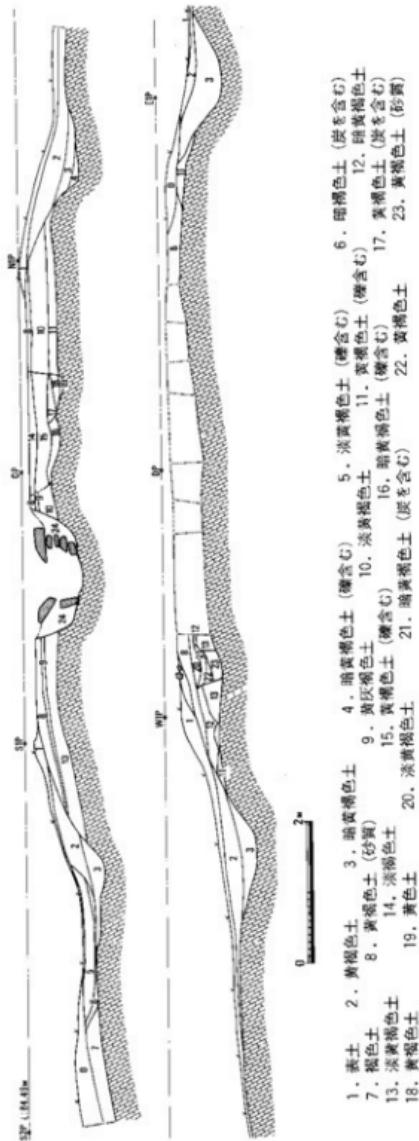
で検出し、石の下部は明らかに盛土内に埋め込んでおり、古墳の外表施設と考えられるものである。しかし列石が直線的であり、おそらくは方形を呈すると考えられるのに対し、墳丘は円形であり、かつまた列石の方向と主体部の主軸方向とともに何ら関係性は見い出することはできない。したがって石の下部が盛土内に埋め込まれているとは言え、墓地を囲う施設とも考えられることから、結論を下すまでに至っていない。

II 周溝

古墳は墳壇に溝をめぐらしており、その外側までの規模は南北12m、東西12.7mを測る。溝は全周掘削されているが、南東が幅広く、南西はやや狭い。また深さも一様ではなく、東側が深く西側が浅い。

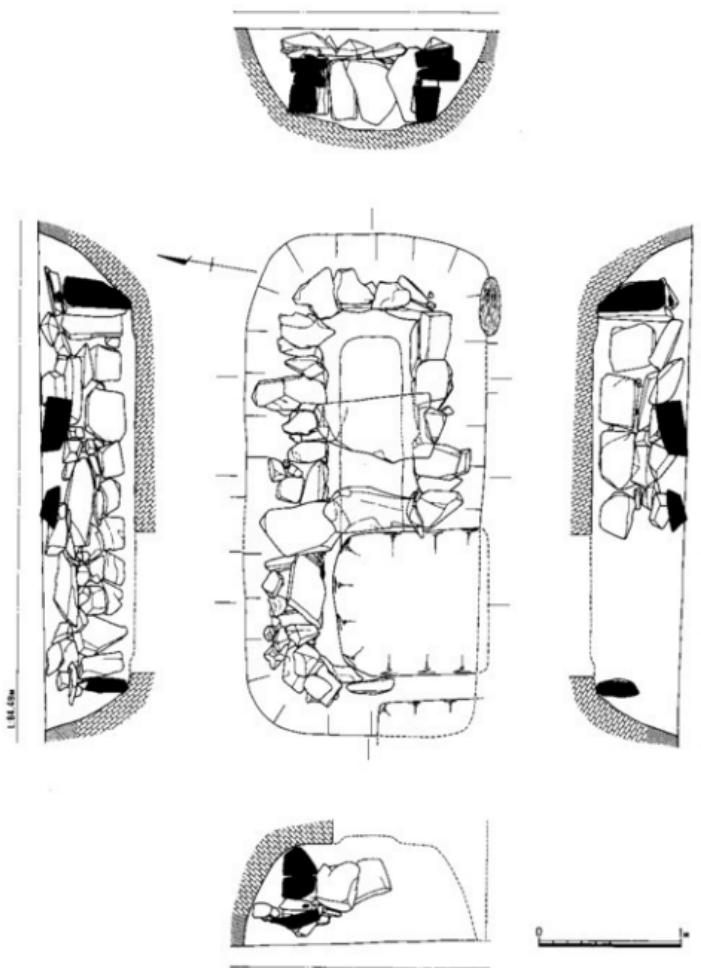
溝の底からの立上りは、墳丘側はすべて急峻になっているのに対し、外側へは東側が墳丘と同様の立上りを呈する以外は緩やかである。

周溝内の流入土はほぼ周溝上部まで暗褐色土が堆積しており、その上に墳丘からの土、あるいは表土が堆積している。そのうち南西の暗褐色土中には須恵器の甕の破片が含まれていた。

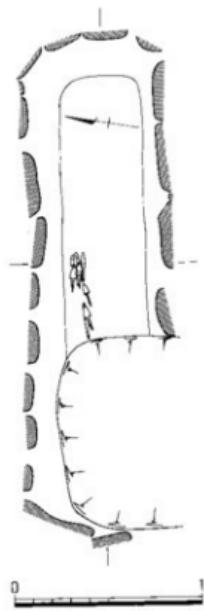


第5図 墳丘断面図

III 埋葬施設



第6図 南主体部実測図



第7図 副葬品出土状態

検出された埋葬施設は墳頂中心部から南に偏しており、北側にもその存在が予想されることから、前者を南主体部、後者を北主体部としておく。

南部主体

南主体部は主軸を東西方向にむける堅穴式石室である。墓壙は長方形を呈し、地山を深く穿っている。底部からの立上がりは急峻で、石室の側壁との隙間は狭い。規模は検出面で長さ3.6m、幅1.7mを測る。

墓壙中央部には内法の全長2.6m、幅70cmの堅穴式石室が築かれている。石材は角の取れた河原石状の扁平な石を使用しており、下段は石の一番広い面を内側にして立て、その上は横口、あるいは外口積みを行っている。

蓋石は石室よりやや長い板石を用いており、2枚が現存する。この現存する蓋石の上には墓石が置かれ、蓋石と蓋石の間に骨壺が埋められていた。東端は須恵器を掘り出した場所であり、蓋石は取り去られ墓石の一部に利用されていた。また西側には土葬の墓穴が深く穿たれており、蓋石はおろか壁石も破壊されている。

床面は中央部が長方形に浅く掘られている。おそらく木棺を置いたものと考えられ、底が平坦であることから箱式木棺であった可能性が強い。

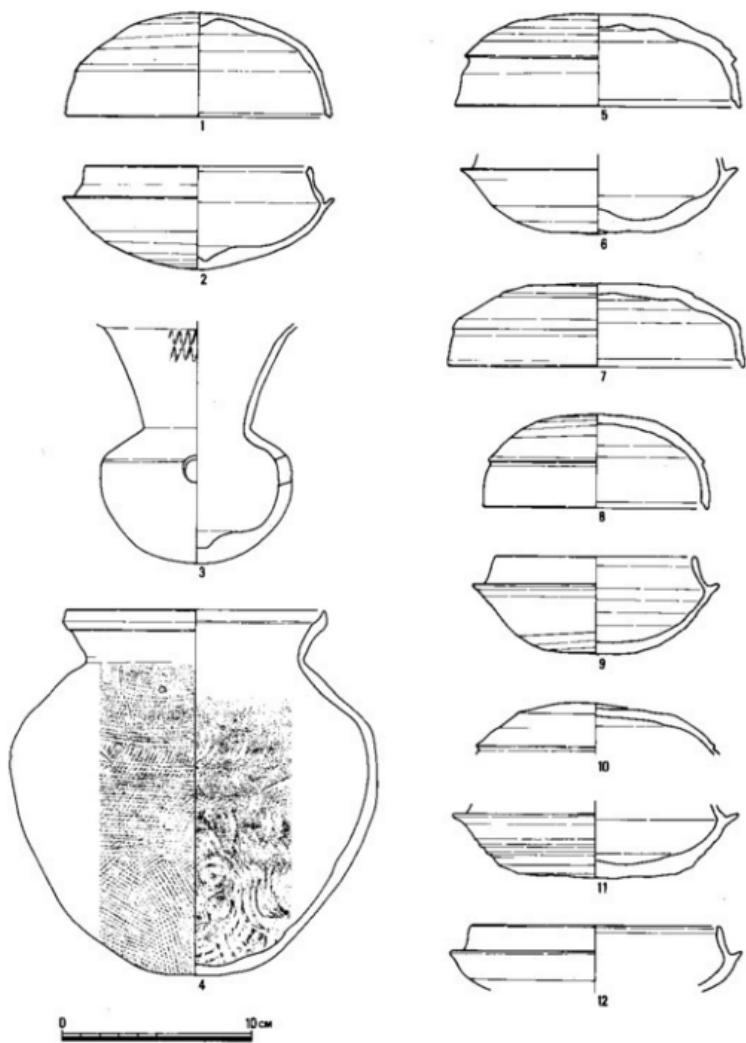
副葬品出土状態

石室内の副葬品は僅かに中央部に鉄製品の一群が残存していた。その状態は原位置を移動したとは考えられず、木棺内の側壁に接して刀子1本と鉄鏃8本が先端を東に向けて置かれていた。

御津町公民館に展示してある金川古墳出土と伝えられる須恵器（第8図1～4）は、関係者の証言から石室の東端と考えられた。また西端の土葬埋土中からも須恵器（第8図5）が出土しており、本来この石室内両端に須恵器が副葬されていた可能性が強い。

北主体部

北主体部は南主体部が南に偏していることからその存在が推定された。そこで第1主体部の北側にトレンチを3本設定し、その確認に始めた。しかしながら、土葬による擾乱が著しく、確実に主体部が存在するという資料は得られなかった。ただ土葬の埋土中から須恵器が出土しており、土葬が掘り上げた土をそのまま埋め戻すとすれば、本来この位置に遺物があった



第8図 須恵器

可能性が強く、主体部推定の傍証となろう。

VI 遺物

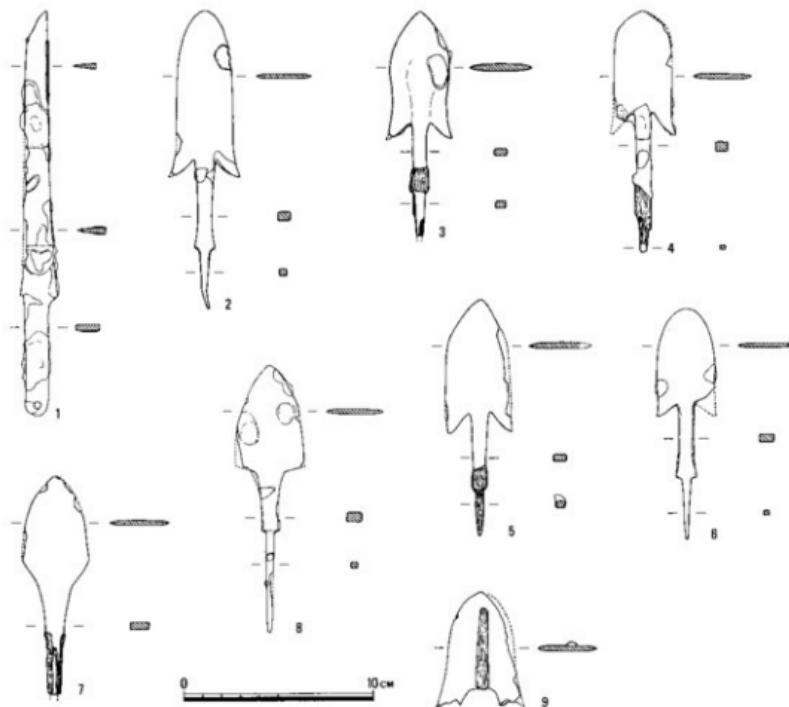
須恵器（第8図）

伝金川古墳出土品（1～4）

墓を作る際に南主体部東端から掘り出したと伝えられるもので、現在御津町教育委員会で保管展示している。詳細は不明であるが、本墳からの出土品であることは確実である。

1は杯蓋で口径14cm、器高5.5cmを測る。天井部は丸くなり口縁部とを区切る稜線はにぶくなれる。調整は天井部外面の3/4がへら削り、その他は内外面とも横ナデにより仕上げる。

2は杯身で最大径11.8cm、器高5.6cm、口径11.9cmを測る。底部は尖りぎみに丸くなる。立上



第9図 鉄製品

がりは長いがやや内傾する。調整は底部外面の刃がヘラ削り、その他は横ナデを施す。

3は甕で、口縁部を欠損している。頸部は太くやや外方へ長くのび、口縁部に接する位置に櫛描波状文がめぐる。腹部下半はヘラ削りにより仕上げられる。

4は甕で、最大径19.5cm、口径13.7cm、器高19.5cmを測る。調整は口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は平行タタキの後上半はカキ目で仕上げる。腹部内面は同心円タタキで仕上げる。

南主体部西端出土品（5）

南主体部西端にある土葬の墓穴から出土したもので、図示したもの以外にも数個体分の破片が出土している。

5は杯蓋で、口径15cm、器高5cmを測る。天井部は扁平で、口縁部とわける稜線は明瞭である。調整は天井部刃がヘラ削り、内面中央が仕上げナデ以外は横ナデにより仕上げる。

北主体部出土品（6）

南主体部の北側に位置する土葬墓穴から出土したもので、図示したもの以外にも数個体分の破片が出土している。したがってここに須恵器が副葬されていたものと考え主体部を推定した。

6は杯蓋で、口径12cm、器高5cmを測る。天井部は丸く、口縁部とわける稜線はややにぶくなる。調整は天井部刃がヘラ削り、内面中央が仕上げナデ以外は横ナデにより仕上げる。

周溝表土出土品（6, 7, 9~12）

古墳の北面側から北側にかけての周溝表土中から出土したもので、墓穴掘削時に出土した北主体部の遺物を捨てたような状態であった。

すべて杯で、口径が小さく丸みをもつものと、口径が大きく扁平なものとがある。蓋は天井部と口縁部とをわける稜線がややにぶくなる。身の立上りは長いが、やや内傾化している。

鉄製品（第9図）

小刀（1）

長さ21.8cmの小刀である。刀身は茎に近い所が一番幅広く、刀先にむかって幅を狭めてゆく。関部は刀身から直角に幅を狭める両側である。茎には目釘穴が認められる。

鉄鎌（2~9）

鉄鎌はすべて平根式のものであるが、有茎のもの（2~8）と無茎のもの（9）とが認められる。有茎のものはさらに逆刺のあるもの（2~6）と無いもの（7, 8）とがある。

有茎鎌で逆刺のあるものは柳葉形、長五角形状を呈し、すべて平造である。有茎鎌で逆刺の無いものは三角形状を呈し、これも平造である。

無茎鎌は長三角形状を呈し、底辺には重快の逆刺がある。断面は平造である。

第V章 結語

金川古墳は旭川に面した丘陵頂部に所在し、調査の結果周溝をめぐらす南北9.8m、東西10.6mの円墳であることが判明した。

主体部は墳頂中央部から南に寄った位置に南主体部が検出され、その北側には北主体部が推定された。南主体部は墓壙内に全長2.6m、幅70cm、高さ45cmの竪穴式石室が築かれている。この石室の下段は箱式石棺に類似した作り方をしているが、側壁は3段に積み上げており、竪穴式石室の範疇でとらえられる。

このような石室は古墳時代前半期の竪穴式石室に比較して著じるしく簡略化されたものと考えられ、横穴式石室導入以前の埋葬施設として採用されている。これに類似したものとして、古墳時代後期の竪穴式小石室がある。県内での類例は乏しいが、奈良県での集成資料（註1）によると30例以上認められる。これらはいずれも規模が小さく、全長は2.2mが最も大きく、1～2m間が最も多い。また一墳丘内で他の埋葬施設と併用される場合は従属的な位置にあり、かつ副葬品も少ないことが多いようである。

本墳の場合北主体部が明らかでない以上、南主体部の位置づけも明確にし得ないが、他例のごとく従属的な位置にあるとは考えられず、副葬品も少ないと見える。

次に出土遺物をもとに本墳の築造年代について述べておく。遺物は南主体部出土の鉄製品以外はすべて原位置を移動したものであるが、ここでは須恵器をもとにその年代を示しておく。

須恵器のうち杯は伝えられるものも含めて10個体ある。これらの特徴は、杯蓋では天井部と口縁部の境界が明瞭であり、杯身では受部立上がりがやや内傾するものの長く、口縁端部には凹部がめぐる。すなわち須恵器杯の中では古い様相を呈しているのである。詳細にみるとさらに2大別される。一つは口径が小さく、その割には器高の高いもの、つまり、蓋と身を合せる球形に近くなるものと、他の一つは口径が大きくその割には器高の低いもの、つまり扁平なものとなる。前者をI、後者をIIとする。Iはさらに口径により細別され、小さいものをA、大きいものをBとする。

これらの編年は結論から言えばIA—IIB—IIと変化してゆくものと考えられ、陶邑古窯址群（註2）ではTK47からTK10に相当し、概ね6世紀前半から中葉の年代が得られる。

註

註1 棚元哲夫「馬見丘陵の古墳調査」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第28集 1976年

註2 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966年

図版 1



1. 古墳遠景（南から）



2. 古墳遠景（北西から）

図版 2



1. 調査前の古墳（南西から）



2. 調査前の古墳（東から）

図版 3



1. 確認調査風景 (西から)



2. 確認調査風景 (南から)

図版 4



1. Sトレンチの周溝（南から）



2. 南主体部確認状態（東から）

図版 5



1. 全面調査風景（南東から）



2. 全面調査風景（北東から）

図版 6



1 全面調査風景（南東から）

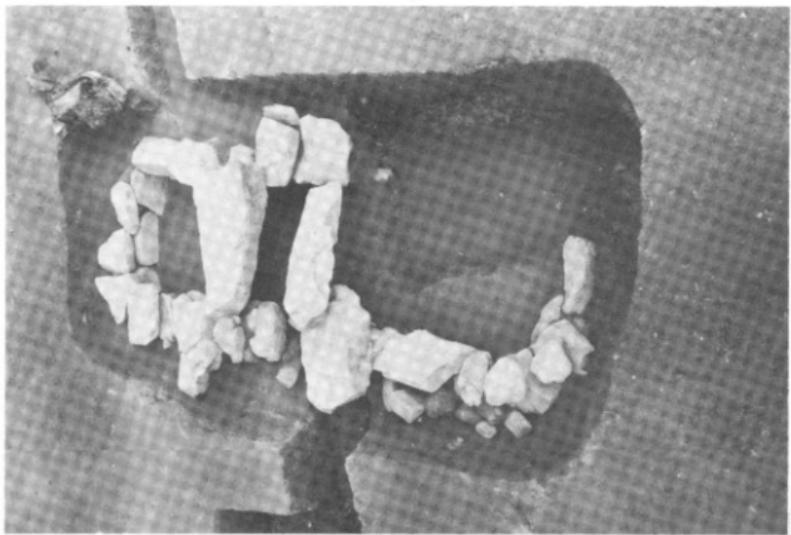


2. 全面調査風景（東から）

図版 7

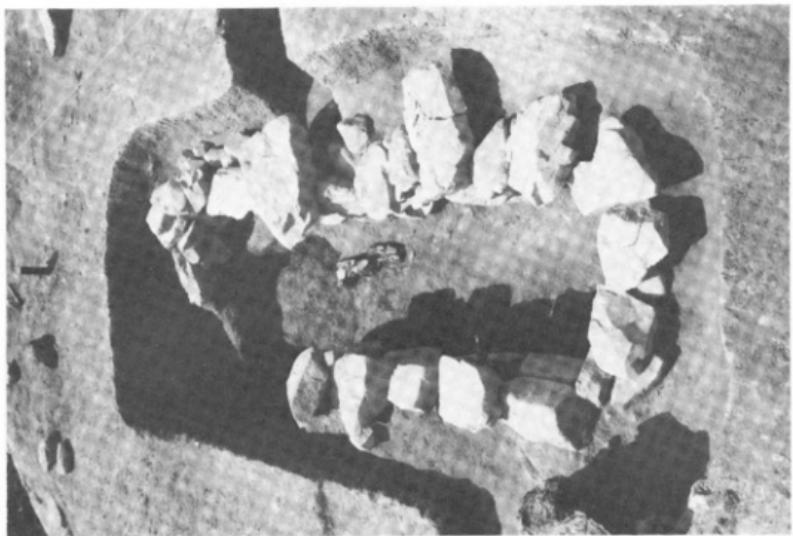


1. 桐州龙 (圖名5)

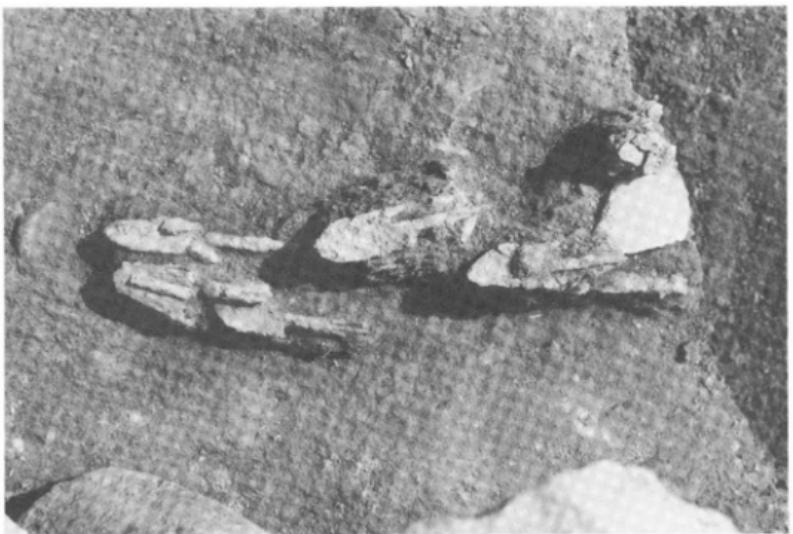


2. 桐州龙 (圖名5)

図版 8

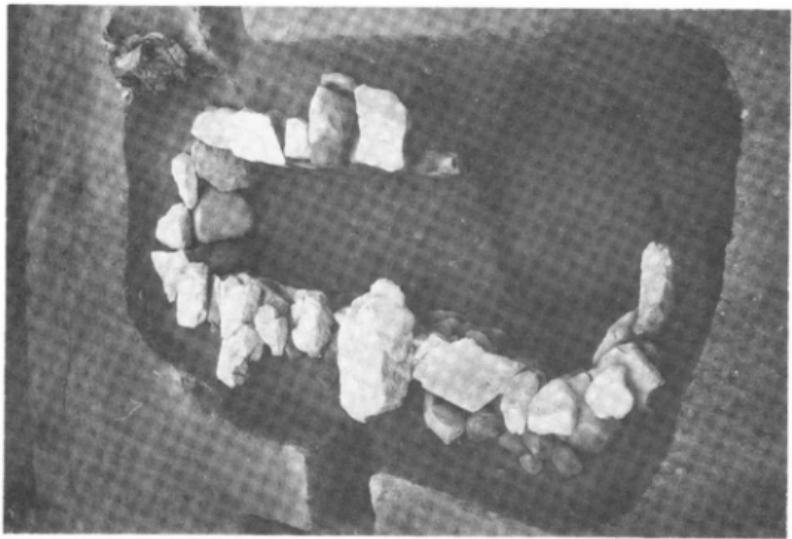


1. 石室の墨石除去（東から）

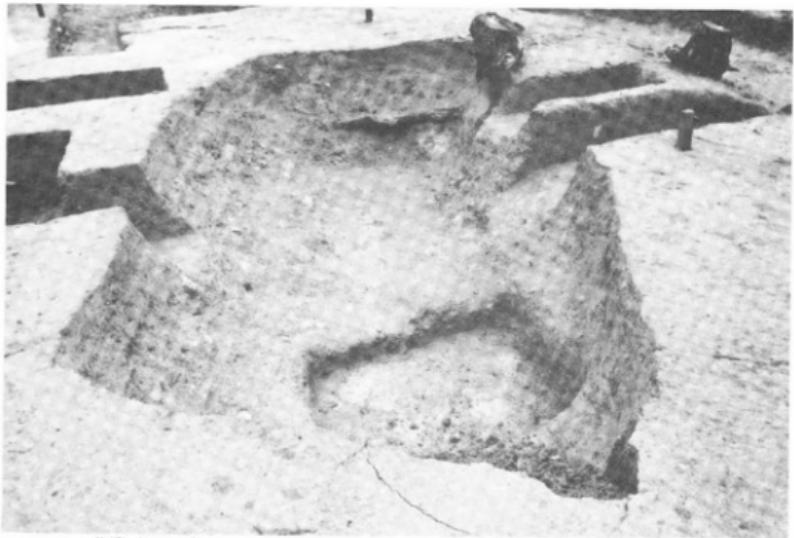


2. 副群品出大形（北から）

図版 9

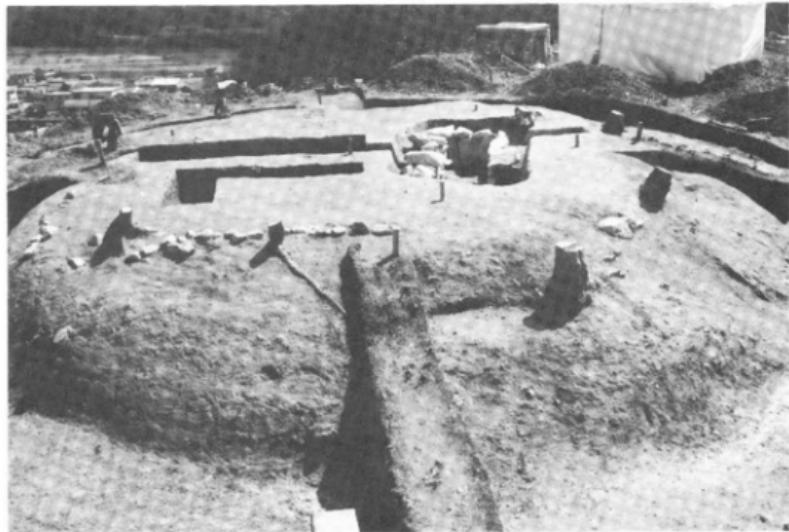


1. 副葬品取り上げ後（西から）

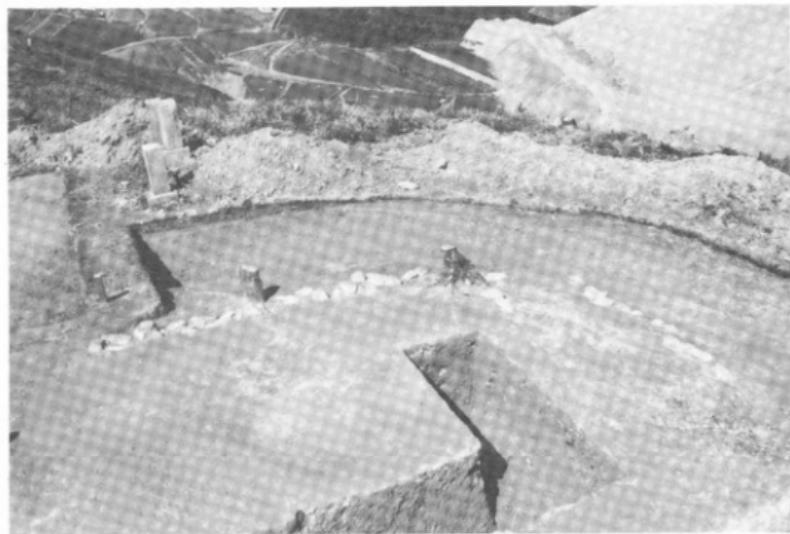


2. 墓壙（西から）

図版10



1. 列石状遺構（西から）

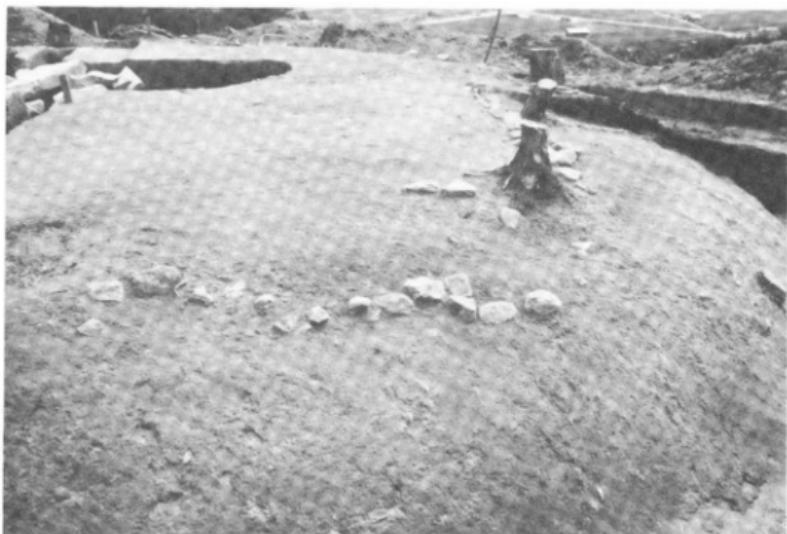


2. 列石状遺構（南東から）

図版11

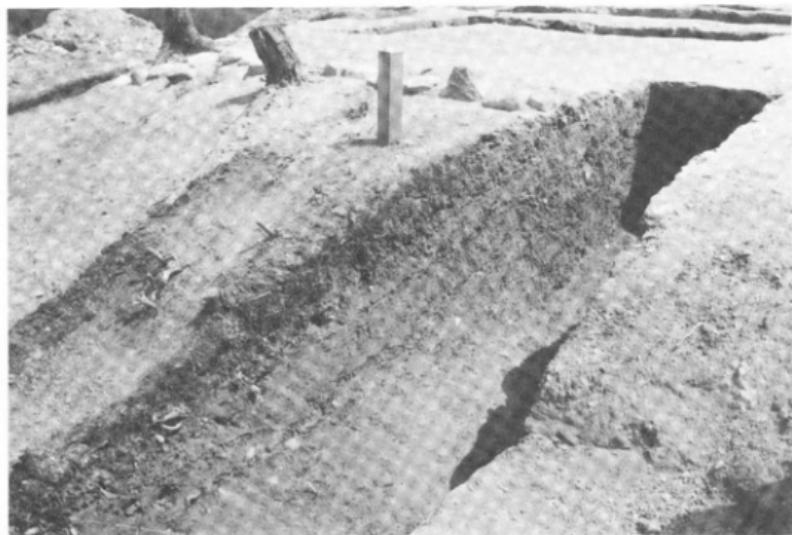


1. 西側の列石状遺構（西から）



2. 北側の列石状遺構（北から）

図版12



1. Wトレンチ墳丘断面（南西から）



2. Wトレンチ周溝断面（南から）

図版13



1. E トレンチ 塗丘断面 (南から)



2. E トレンチ周溝断面 (南から)

図版14

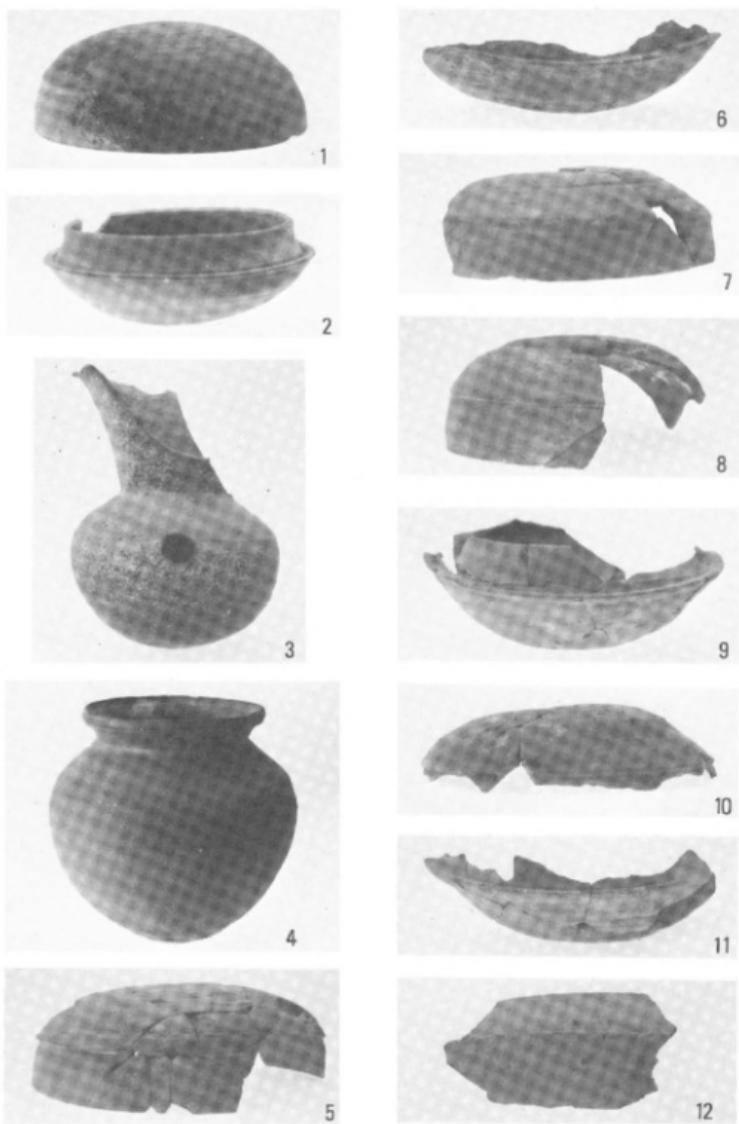


1. 調査後の墳丘（南から）



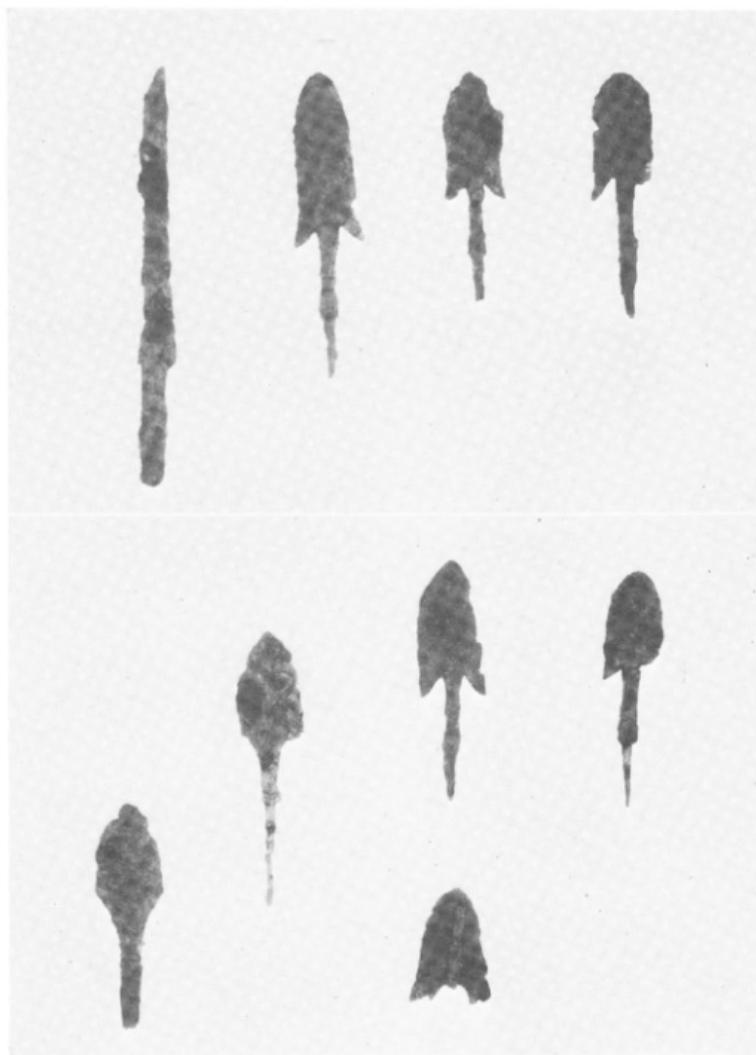
2. 調査後の古墳全景（北西から）

図版15



須恵器

図版16



鉄製品

御津町埋蔵文化財発掘調査報告2
金 川 古 墳

昭和57年3月31日発行

発 行 岡山県御津町教育委員会
岡山県御津郡御津町金川1020

印 刷 西尾総合印刷株式会社横井支店
岡 山 市 横 井 上 90
